

# 1779年のスコットランド蒸留業問題をめぐる 若干の新聞記事について

——晩年のジェイムズ・ステュアートと内国消費税問題——

渡 辺 邦 博

## 目 次

- I. 問題の所在
- II. 資料の概要
- III. 資料についての文献的諸問題
- IV. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』1779年9月27日号
- V. 小括

## I. 問題の所在

アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) の『国富論』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776) よりも9年早く、しかもスミスとは異なる経済学の体系をつくり上げたステュアート (Sir James Steuart, 1713-1780) が、ほとんどの点で慎重であったスミスとは異なり、公民権の回復まで10年近くも待ちながら、もともと政策に関心を持っていたとはいえ、その主著『経済の原理』(*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767) の公刊以降も、経済の現実とのさまざまな接点を求めて、政策的提言を行っていたことは、周知のことであろう。<sup>(1)</sup> 以下において検討されるのは、ステュアートの晩年、1779年に作成されたスコットランドの蒸留業 (distilling) に関するいくつかの文書である。

ステュアートの著作活動についての最新の情報は、アンドリュー・ステュアート・スキナーによる『原理』の新版 (Steuart[1998]) の冒頭に付せられた目録によってうかがい知ることができる。

本稿での問題に入ろう。1779年のステュアートの仕事として、その目録には、*Edinburgh Evening Courant* 誌の記事が2点挙げられている。

つまり、

An Address to the Gentlemen Freeholders of Scotland, in *Edinburgh Evening Courant* (2 October 1779)

---

(1) ステュアートの伝記については、Skinner [1998] の最新版を参照のこと。新版では、ステュアートとジャコバイトとの関係が、Skinner [1966] より一層詳細になっている。

Observations on the State of the Distillery and Brewery, in Edinburgh Evening Courant(4 October 1779)

の2点である。

後で問題となることに関係するので、以上のような文献が列挙される根拠を再検討しておく。そのためには、この2点について、ステュアートと同時代の情報にまで遡らなくてはならない。

ステュアートの死(1780年11月26日)後かなり早い時期に出された、彼の死亡記事(無署名)には次のような1節がある。

「彼(ステュアート)は、最近の法律通過の際に不満が出された時、蒸留所と醸造所の状態とそれからあがる収入について詳細な考察を加え、『エディンバラ・イーヴニング・クーラント(Edinburgh Evening Courant)』の1779年10月2日に匿名で発表することを通じ、スコットランドのいくつかの州がその問題について未熟な決議に入るのを防いだ。」(Scots Magazine, Vol.42, p.624, December, 1780.)

その内容や表現は次の資料に酷似しているように思われる。

第2に、ステュアートの妹のアグネスAgnesの息子であった、バハン伯(Erskine, David Steuart, eleventh Earl of Buchan, 1742-1829)<sup>(2)</sup>は、アダム・スミスのグラスゴウ時代の教子<sup>(3)</sup>の一人でもあったが、彼が執筆したものとされる記事には、

「……彼(ステュアート)は蒸留所と醸造所との状態とそれから生ずる収入とについて詳細に検討することに着手したが、それは、麦芽酒の蒸留用容器の法定容量の拡大と、スコットランドでも麦芽酒に対してイングランドと同様の課税を賦課するとする、政府の法案に端を発する不満に示唆を受けたものであった。この研究の一般的結論を、彼は『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』の1779年10月2日号に匿名で発表したが、特定の論考については、彼の使用した材料とともに、彼は議会の1友人に送り届けたのであった。……」(Archaeologia Scotia ; or Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland. I. 1792, pp.137-8.)とある。

この種の資料については、まだいくつかの類似の例を挙げることも可能である。

おそらく先のバハンの記事からそれほど後に隔たって執筆されたのではないと思われるのだ

---

(2) バハン伯を始め、本稿で言及する人物の伝記的事実については、さしあたりSmith & Lee[1975]を参照した。バハンはErskineの項を参照した。

(3) Ross[1998]の136-7ページを参照のこと。

けれども、有名な伝記作家 Andrew Kippis (1725-1796) は、ステュアートの伝記草稿の中に次のように書いている。

「1779年の夏、一彼は蒸留所と醸造所との状態と、それから生ずる収入とについての詳細な研究に着手したが、この問題は、麦芽酒の蒸留用容器の法定容量を拡大しようとする議会の法令と、スコットランドにおいても麦芽に対してイングランドのそれに等しい課税を賦課しようということに端を発した不満から彼は示唆を受けたのであった。彼の研究の一般的結論は、『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』の1779年10月2日号に匿名で公刊されたが、特定の論考については、彼の使用した材料とともに、彼は議会の1友人に送り届けたのであった。」  
(キップス「ステュアート伝草稿」drafts in *The Coltness Papers*)

以上、ステュアートの同時代のいずれの情報も、「ステュアートが蒸留所と醸造所に関する論説」を作成し、それを匿名で『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』誌の1779年10月2日号に掲載したという点では共通した認識を示している。

それらの認識は、主として先の *Archaeologia Scotia* 所載の、バハン伯の署名になる論説を、おそらく下敷きにしているであろうことも容易に推定できるが、事実、今世紀になって、経済学史上にステュアートを復興させた S.R.Sen も、ステュアート晩年の著作として、An Inquiry into the State of the Distillery and Brewery Industry of Scotland という書物があったかのような表現をしている。<sup>(4)</sup>

他方で、アンドリュー・S・スキナーは、1966年に公刊したステュアートの『原理』の縮約版への付録において、ステュアートが、『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』誌（以下、たんに『クーラント』と略称する）の1779年10月4日号に掲載したものとして、An Address to the Gentlemen Freeholders of Scotland なる論説を挙げている。<sup>(5)</sup> この場合、Sen までの学者の挙げている論説とはタイトルと日付けが微妙に異なっていることに注意されたい。

つまり、バハン以来センまでが伝えるところでは、『クーラント』誌上に「蒸留所と醸造所関係の論説」が10月2日に掲載されたことになっていたが、1966年段階でのスキナーは、それまでの認識とは別に、同誌の10月4日号に「フリーホルダーへの呼びかけ」が掲載されたとしたのである。以上を総合すると、ステュアートは1779年10月になって2つの論説を『クーラント』に掲載した、とも推定される。事実、筆者はこれまで少なくとも同様の問題に関して10月2日と4日との、2つの論説があったものと考えていた。<sup>(6)</sup>

それでは、1779年の蒸留業問題について、ステュアートはいったいどのような論説を、どの

---

(4) Sen[1957]の、17ページを参照のこと。

(5) Skinner[1966], vol.2, p.741.

(6) 渡辺[1989], 23ページを参照。

時点で、いくつ作成したのだろうか、といった諸問題が浮上することになる。以下では、各資料の検討を通じて、この問題に対する筆者の現段階での回答をも提示しよう<sup>(7)</sup>と思う。

## II. 資料の概要

まず、筆者が提示できる限りで、この問題に関する資料を列挙しよう。

その1つは、エディンバラ大学のチャーマーズ文書の中にある From the Edinburgh Evening Courant of Monday October 4th 1779 と題された草稿と、スキナー [1966] 以来、す<sup>(8)</sup>でにある程度は周知のものとなっている、その『クーラント』における活字版である。

第2は、先の新聞記事に先立って、9月30日の日付けを持つ、ステュアートからバハンにあてた1通の書簡である。(スコットランド国立図書館所蔵, MS968)

最後に、For the Edinburgh Evening Courant. To the Gentlemen Freeholders of Scotland, who are soon to be assembled in their Michaelmas Meetings. と題され、以上の資料の中では最も古い9月26日(『クーラント』での掲載は27日)付けの記事と、その草稿である。

以上の3つのドキュメントは、いずれもスコットランドの蒸留業の現状を焦点にしており、とりわけ最初の10月4日付けの記事などは、9月27日付けの記事に対する回答であることを冒頭に明言し、9月27日付けの記事の本文を引用しつつそれにコメントしているから、3者は一連のものともみなすことができる。この蒸留業者問題については、後述のように、5月末の法令公布の前後から、当該の『クーラント』だけに限っても、少なからぬ関連記事が掲載された

---

(7) ここで、*Edinburgh Evening Courant* について若干の説明をしておこう。この新聞は、やはりエディンバラを舞台とした *Caledonian Mercury* や *Ruddiman's Weekly Mercury* と並んで、18世紀のエディンバラにおける指導的な新聞であって、Robert Fleming や Alexander Kinkaid によって、週に3回出版されていたものである。実際にこの新聞を何度か検索してみれば分かるのだが、その出版日は、原則として月・水・金(土)であったようである。Craig, Mary Elizabeth[1931], p.25. Crane & Kaye[1927], p.34. Weed, Katherine Kirtley & Richmond Pugh Bond[1946], p.68. Marr, George. S.[1923]などを参照のこと。

(8) このチャーマーズ文書とは、ステュアート著作集を編纂する過程で、George Chalmers (1742-1825) が収集した、関係文書の綴りであって、本稿でも問題とする10月4日付けの草稿をはじめとして、ステュアート関係のものだけが10数点綴じられている (La III, 515/2)。1993年にエディンバラでこの資料を閲覧した時でも、損傷がひどく、複写に制限が加えられていた。ここで、この資料を早い時期に日本に持ち帰られ、そのマイクロ・フィルムをこころよく提供して下さった川島信義先生に感謝したい。

想像されるのだが、本稿の場合には、10月4日の記事が従来ステュアートの手になるものとされ、他の2者はこれに関係していると判断されるという点からだけ、注目されているのであって、その意味では極めて制限の多いものである。念のために。

### III. 資料についての文献的諸問題

さて、以上の資料の中では最も古い、9月26日（掲載日は27日）付けの記事と、その草稿だが、この草稿の方は、ある程度ステュアートの筆跡を見たものならステュアートの手になるものではないのではとも考えられるが、チャーマーズ文書の中にあったこの草稿の本文（9月26日付）と、活字となった記事との照合を行えば、些細な相違点を除けば、両者に内容上の違いは見出せない。記事のキャプションには、『『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』へ』という見出しにあたる字句と並んで、「まもなく聖ミカエル祭〈聖ミカエル祭は、9月29日に行われる。渡辺〉の集会に参集するはずの、スコットランドのジェントルマン・フリーホルダーへ」というサブタイトルがついているだけなのに対して、草稿の方には、その冒頭に、本文と同じ筆跡で、「1779年9月27日月曜日の『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』から——サー・Ja・ステュアートによる」と言う書き込みがある。草稿の方にだけ存在する、この書き込みをどう判断するかは、そう簡単ではないので、この点に関する著者の見解の提示はしばらく留保したい。<sup>(9)</sup>

確実なことは、「スコットランドのフリーホルダーへの呼びかけ」という体裁をとった、この9月27日の『クーラント』の記事を出発点として、同誌上を中心に小さな論戦が開始されたこと、9月30日には、ステュアートからバハン伯あてで、この記事にある程度重なる論点を含む書簡が書かれたこと、次に、「先月の27日月曜日の『クーラント』誌の1著者は、蒸留業に関する最近の法律問題について、スコットランドのフリーホルダーに対する演説においてかなり大きなスペースをとっていた。」という形の書き出しで始まる、9月27日の8項目の「示唆」に完全に対応する形で、同じ問題を論じた論説が、10月4日の『クーラント』に掲載された、

---

(9) 1779年のカレンダーは、本年1999年とまったく同じであるから、その年のどの月のどの日をとっても、1999年と同じ曜日となる。9月27日は月曜日、9月30日は木曜日、10月4日は月曜日であった。行論に関係するので、記憶されたい。

この論説は、ステュアートの研究史上でもほとんど言及されて来なかったものである。ポール・シャムレーは、これが、ジェイムズ3世（1688-1766）死後にもステュアートがステュアート王家を支持していたかもしれないことの証左として、この論説を利用している。「1779年、すぐに誰だと分かる匿名の文章において、彼（ステュアート、渡辺）はスコットランドの地主に対し、新たな蒸留の規制に過激で暴力的な抵抗を示すことによって、反乱に手を貸すことのないよう、懇願している。」（Chamley[1965], pp.47-8.）これが著者の知る限り、研究史上で、唯一この論説に言及した例である。シャムレーは、この論説の著者が、明らかにステュアートであると、みなしている。シャムレーを解釈する際に、本学経営学部の富増和彦氏のご教示を得た。記して感謝したい。

という経緯である。

「民間の蒸留業者による不正をより効果的に防止し、あわせて度数の低いブドウ酒やスピリッツに対する税を確保するための法律 (An act for more effectually preventing frauds by private distillers, and for the better securing the duties on low wines and spirits.)」が、1779年5月31日にイングランド議会で国王の承認を得た。(Scots Magazine, Vol. 41, May, 1779, pp.273-4.) 法律の名称に言われているように、度数の低いアルコールからあがる税の減少を、主として小規模蒸留所に対する課税で切り抜けようとしたものであった。その第1条に曰く、「1779年6月24日以降、蒸留に適した発酵液を製造または貯蔵し、蓋をした状態の容積が2ガロンないし、それ以上にのぼる蒸留器をみずから所有する者は誰でも、販売を目的とした通常の蒸留業者とみなされ、内国消費税を支払う義務があり、内国消費税担当役人の調査に従わなくてはならない、等。」と。(Scots Magazine, Vol.41, June, 1779, pp.329-330.)<sup>(10)</sup>

この法律が通過した前後の、スコットランドの情勢の詳細については、今のところこれ以上のことは分らない。しかし、ここで問題とした3つのドキュメントをもそこに巻き込んだ、その法律をめぐるかなり幅広い論争が当時のスコットランドに存在したのだとみなしても大過ないであろう。

1824年以前では、ブリテンとスコットランドで1ガロンの容量が異なる(つまり、スコットランドの1ガロンは、ブリテンの約3倍であつたが、<sup>(11)</sup>1ガロンは8パイントに等しい、ブリテン流に考えると16パイント、スコットランド流なら24パイントとなるが、いずれにしても、2ガロンを課税基準とするのは、家庭用の蒸留をも税の対象とするものであつて、小規模な蒸留を行っていた者たちからの抵抗が、予想されても当然であろう。ここに言う最初の論説は、小規模な蒸留業者の側からの、この法律に対する反対論と、論説が呼びかけの対象としたフリー

(10) 時代は少し前になるが、ここでわれわれは、アダム・スミスの『国富論』第5編第2章第4項の消費財にかかる税 (Skinner, [1976], V, ii, k, esp.45-50) における記述を想起する。

スミスは、1772年から1775年までのグレート・ブリテンにおける各種税額を計算して、平均をとれば諸税総額は年額にして約259万5853ポンド7シリング9 11/15ペンスであつたが、同じ期間の麦芽税平均年額である95万8895ポンド3シリング3/16ペンスが、麦芽税を3倍にする案によって、287万6685ポンド1シリング2 14/16ペンスに増額する、という試算を行なっている。時代が若干下り、この場合には、ビールやエールなどへの課税の全廃が仮定されているので、後述するステュアートの9月30日付け書簡の1/3引き下げ案とは、少し異なるけれども、課税品目を最終製品から半製品へとシフトさせる考えという点では、相通ずるものがある。

(11) Grant[1986] の Gallon の項を参照。formerly in Scot. Roughly equal to three Imperial gallons or twelve quarts. Since 1824 the Imperial measure has been generally adopted.

Scottish gallon of 8 Scottish pints, "by which ale, beer, etc. are usually sold," was found to be the Imperial gallon as 3.0065122 to 1.

ホルダーの立場を峻別しながら、8項目にわたる「示唆」を与えて、問題の再考を促したものである。

論説の前半部分は、この問題をめぐるブリテン議会の思惑や、それに対するスコットランド側の政治的判断が述べられているが、それは結局のところ、その法律の実効性には疑問が持たれるのであって、性急な撤廃の要求など不要である、ということに尽き、その点で後の2者の資料との隔絶はない、と思われる。ここで第1の論説内容を、8つの項目についてだけ簡潔に、まとめておこう。

新規制が行われても、

- i) 従来の麦芽製造人や醸造業者に、材料である麦芽の購入者として、大蒸留業者が加わると、さらに競争が激しくなって、独占の成立する余地がなくなる。
- ii) 原料・燃料がかさばる性質を持っているので、蒸留業者は各地に分散せざるを得ないが、これもまた業者間の提携にとってマイナスである。
- iii) 業者の提携によって法外な利潤が発生しても、交易の抑制がなければ、新規参入によって、利潤は通常の水準まで低下する。
- iv) 小規模な蒸留業者たちの言い分は、規模に応じた免許料を支払うというものだが、供給側に競争力の異なる者たちが、競争状態にある市場で、営業活動を行えば、小規模な業者が敗退するのだから、その言い分は受け入れられない。
- v) 大規模蒸留所に比べて、小規模な蒸留所は、より優れた品質の商品が生産されるという議論は、新規制がなかった従来でも、製造される品質に違いはなかったという点で、説得力がない。
- vi) と vii) は、記事の著者が与えた「示唆」にそれではどんな答えが出せるのか、という問題提起である。しかし、いずれも同根のものである。新規制のもとで、農業者は原料提供者であるのはもちろんのことであるが、蒸留酒の消費者として、大蒸留所から、かつては自家生産できた蒸留酒や家畜用飼料を、持ち帰らなくなる、この事態はどうするのか？というわけであろう。

最後のviii) は、農業とともに酒造をも行うのが必要なスコットランドでは、新規制はそれに道を閉ざすことにならないか、と「示唆」を与えているのである。

次に節を改めて、その本文を、草稿と記事との相違を示しつつ、訳出しよう。(記事本文は、段落別けがあるだけで、すべてベタに並べられているが、読みやすさを考慮して、段落ごとに一行空けておいた。)

#### IV. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』 1779年 9 月27日号

「

〈Ja.ステュアート『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』から、1779年 9 月27日月曜日〉

まもなく、ミクルマスの会合に参集するはずの、スコットランドのジェントルマン・フリーホルダーたちへ

哀れなるかな、熱狂状態になった市民は！

私が筆を執っている問題の重要性にかんがみて、まったく見ず知らない人からの、この呼びかけのぶしつけな点を、ご海容して下さることを私は希望する。

これはパース州によって、さらに私の信ずるところでは、あなた方の他の州のほとんどの方々によって、蒸留業に関する最近の規制を考慮するにあたって、留意されていることである。だから、この問題に関するあなた方の結論が確定すれば、それは、あなた方が現在意識しているよりもずっと重要な意味を持つことになるだろう。

(もしあなた方の結論が現行法に対立するとすれば)、これは、9ヶ月という期間がたたないうちに、グレート・ブリテンの最高立法機関が作成し、スコットランドが反対した、第3番目の法律になるであろう。

この結果を思い返せば、おそらくある人々にとっては、現在の行動に対する刺激と考えられるかもしれないが、過去と現在との事実の間に存在する隔たりについて考慮をめぐらすという労をとるほどの人なら、大変異なった結論をくだすことになるだろうと、私は確信するものである。

前者が取り組んでいる数々の不都合の影響をうけている、この労苦については、これまで注目されてこなかった。その中でも、これが、3つの試みのうちの最後のものとなるかもしれない、ということは、決して一番後回しにしてよいことではないのである。立派な性質が知れたるか、お望みなら、みずからの見解を転換したり、お気に入りの計画を放棄するということで、一度ならずその判断力に確信が持たれている人物は、同じ人々によって、同じ事柄が3度試される場合には、自分はだまされているのであって、彼らが自分の知性について、はなはだ貧しい理解しか持っておらず、利害関心のある見地からだけ彼を利用しようとしているのだ、と疑いを懐く傾向がある。<sup>(12)</sup> われわれが指示を求めている人物が懐いている、そのような考えは、



われわれの計画にとって非常に不都合であると、考えざるをえない。さらにこれ以外のどんな見解を、内閣は、あなた方とあなた方の計画とについていただくことができると言うのだろうか。彼らの判断とは一度ならず異なり、彼らは、あなた方の抗議によってその対策を変更し、彼らのお気に入りの計画をご破算にするか、改変するほどの気にさせられて来たのである。もしもあなた方が、みたび同じ企てを起こすとしたら、彼らは、あなた方に軽んじられ、だまされたという考えを起こさない危険はないのだろうか？ また、彼らにそれ以上の動機は、なかったと思うが、なかったけれども、羞恥心、執着心、あるいは高慢にかられて、彼らが、あなた方に対立することはないのだろうか？

現在の試みにとって都合のよくない第2の事情は、(それをそう考えざるをえないのだが)、それが発生する時点の問題である。

確かな判断力のあるスウィフトは述べている。「罪悪感や不名誉を伴う不運ほど、人から慎重に行動する力を奪うものはない。」と。そのような原因が、われわれの現在の内閣に作用する可能性があるとか、ともかく当然であるとかを、私は決してほのめかそうとするつもりはない。しかし、人々はもっとも危険なことの真っ只中にある場合には、しばしば非常に軽率な行為に走りがちであり、わずかな危険しかない場合には、権威に対する攻撃に対して非常に用心深くなることがあるように、われわれの内閣は、その現在の地位を見れば、非の打ち所がなく、揺るぎないものなどと、決して私は考えないけれども、他の時なら自分たちの友人の穏やかな忠告と思われるかもしれないことを、今なら、ある党派の無礼な叫び声であると解釈しかねない。

あなた方のこれまでの理解には好都合だが、現在のそれには沿わない、第3の事情は、それらの中であって、あなた方が異を唱える諸方策を承認し、それらを法律として通過させてしまった議会の結合した勢力に、まさしく今あなた方は反対を唱えているけれども、あなた方が異議を唱えていなる方策は、作成されてはいても、是認されても、実施されてもいないもの<sup>\*</sup>だ、ということにある。

\* これが実情なのだから、あなた方の反対をしばらく中止するほうがより賢明なのではなかろうか。というのも、その法律は現在同様に、今後12ヵ月<sup>(13)</sup>は明らかに無効となるだろうから。そして、

---

(12) 「疑いを懐く傾向がある (be apt to suspect that…)」の“that”は、草稿にはなかった。

(13) 「その法律は現在同様に、今後12ヵ月は明らかに無効となるだろうから。(the law will be as easily repealed a twelvemonth hence as now;)」は、草稿では、“the law will as easily be repealed a twelve month hence as now;”となっていた。

その後なら、あなた方は、漠然とした不満や根拠のない不安ではなく、自分たちを代表する経験を提示したり、もしも発生することがあれば、真実の困難を示すことができるという優位な立場に立つのである。

カトリックを救済する法律や、キャンペリック法は、彼らのうちの誰一人として議会に参加させることにはならなかったし、さらにわれわれはまた、誰にせよ、第1のものの導入を防ぐのに必要だった激しい動乱のことを熟知している。さらに、その国の西側の地域は、それから大きな影響を受けてきたのだったが、第2のものに対抗するのとはほとんど同じだけの影響をこうむったのだった。そこで、われわれは次のように考えてもいいのだろうか？ すなわち、ある法律の通過を防止するのではなく、その撤廃を勝ち取るには、力がないことが必要だとか、ある法律に反対することは、それが実施された場合にそれを履行しないことよりも、もっと難しい、とか。そのようなことが、あなた方の成功を妨げるのに重なり合う諸理由であるから、その企ては危険なしではすまないであろう。

ひろく認められているように、もしも、この重要な局面で、われわれの擁護に満場一致がどうしても必要であれば、優れた分別と地位があるということで、人々から当然の指導者であると認められているあなた方は、服従や屈服の見本を見せるのではなく、頭目とは言わずとも、暴徒の中の最低の部分に加わり、自ら範を示して、彼らの支配者への服従を思いとどまるように、彼らに方向付けを行う場合に、あなた方の行為をあなた方の国に対して、どのように釈明することができるのだろうか？ 愛想は良くとも、思いやりが欠けたものから感化を受けたとすれば、あなた方は、人類のうちで最低にしてもっとも卑しむべきものにそそのかされることに甘んじることになるが、そのやからは、政府の諸方策への反抗に関与することになると気がついて、あなた方の援助によって自分たちの言い分を強化し、あなた方もまた関係があるのだと、あなた方を説得しようと望むのである。

それとも、この下劣極まる反対者の目的は、個々の法律の撤廃に限られないのだろうか？ 強く疑われているように、もしも反乱の同調者たちが、カトリックの法律に関する最近の反乱の原因であったとすれば、現在盛り上がりつつある騒動が、われわれの自由と基本法の敵によって、少なからず促進されたり、助長されるのは、確実ではないのか？

さらにもしも、どんな考えをもってしても、不満に対して一つの偽りのない根拠を指し示すことができず、考えられる危険や、想像上の怖れについてただ語ることしかできない場合に、理論的な諸原理だけでは、その国中に非常に大きな不安をかき立てることしかできないとすれば、それに対して、彼らの感じるいく千もの感情や想像と、影響をこうむるはずの彼らの利益

とが、その国で並ぶ者のないほど立派な人々によって奮起させられ、指揮を受けた、彼らの熱情と、対立するようになった場合に、とりわけ、彼らが遭遇するはずの反対派が、はるかに暴力的でねばり強いような時には、結末はいったいどうなるのだろうか、と考えるのは、その運動に登場する重要人物の一人だけではあるまい。

あなた方の利益は、現在の規制によって影響を受けているのでは決してないし、将来その撤廃によって促進されるわけでもない、ということは、以下のような示唆を、少し綿密かつ注意深く考察すれば、おそらく明白になるであろう。

(14)  
I. これらの諸規制は、大麦をめぐる競争を減ずるところか、増大させる傾向を持たないだろうか？ というのも、小規模な業者に限らず、そのうちの誰ひとりとして、農業者からその材料を購買できないだろうから（というのも、大麦は、農業者がそれを使えるようにするには、麦芽にならなければならない）。それらの諸規制は、当の市場における競争者たちとして、多数の大規模な蒸留業者を導き入れる。麦芽製造人や醸造業者だけが買い手であった時に、独占が発生しなかったのなら、蒸留業者たちもその数に加わる今にいたっては、それが行われるはずもない。

II. 蒸留業者たちをめぐるこの状況では、大麦の価格を引き下げるにせよ、スピリッツの価格を引き上げるにせよ、彼らが提携〈結合？combination〉できるような傾向はないのではなかろうか？ 大麦や、燃料のような素材は、かさばる性質を持っているために、彼らはその国の非常に不便な諸地域に住まなくてはならない。そこで、彼らが、頻繁に会合を持つのが不可能になって、そのため自分たちの結合を形成することも、維持することもできなくなるのである。

III. 蒸留業者たちが、提携〈結合〉する傾向と機会の両方を持っているとしても、交易の自由が独占を効果的に防止しないのだろうか？ もしも、6つの大蒸留業者以外の、全世界が、大麦を購入したり、ウィスキーを販売するのを禁止されるとすれば、その場合彼ら〈大蒸留業者〉は、一方を現行価格の半分で購入し、他方を途方もなく高く販売しようと努力するであろう。しかし、交易になんの抑制も加えられていない現在、彼らが同じことをやろうとすれば、法外な利潤に誘われて、多数の者たちが、同じ方法で営業を開始するようになり、その者たちの競争がまもなく、この交易の利潤を、他のすべての営業における利潤の通常の水準のところまで引き下げるであろう。

---

(14) 以下、I～VIIIまでは、草稿では、“1st”、“2d”、“3d”、“4th”、“5th”、“6th”、“7th”、“8th”となっていた。

以上の3つの考察は、われわれが独占のもとにある場合の、ささやかな脅威について、どんな公平な人 (impartial person) であっても、確信させるのに充分なように思われる。

IV. それがごくわずかな意味しか持たないならば、その法律の反対者のある者たちが提案する計画が実施されるとして、以上のような規制が、スピリッツの価格を引き上げるといっても引き下げる、少なくともそうなるかもしれないところよりも低く保つという傾向を持つ、とわれわれは考えてもよいのだろうか。彼らが提案するのは、あらゆる規模の蒸留所が認められ、それぞれの蒸留業者は、その蒸留所の規模に比例した免許料を支払う、というものである<sup>\*</sup>。しかし、大きな蒸留業者は、燃料や大麦の購入で節約できるので、(というのも、彼らは直接購入によって、品質と価格の点でより有利にそれを手に入れるから)、いつも小さな蒸留業者よりも安く売ることができるのに対して、後者は、収入をごまかしたり、スピリッツに混ぜものを入れることによってだけしか、節約することができない。それは、正直であるよりも狡猾であることと並んで、彼らが今のところ仕事仲間とみなそうとしている、やり方なのである。租税があまねく行われた場合、大きな蒸留業者たちが、小規模なものたちよりも安く売ることができるということは、彼ら〈大蒸留業者〉は、他方〈小蒸留業者〉が免れている税を支払っても、なおかつ、その人たちによって損をこうむったことは、数年にわたって決してなかったということによって、明らかとなるように思われる。

\* 小規模な蒸留業者の友人である現行法の反対者たちによって繰り返し提案されて来たけれども、小規模な蒸留業者は、収入のごまかしによって節約しなければ、その法律の下では決して生きることができなかったことである。彼らは、自分たち自身の声明書が唱っているように、営業としての蒸留業に従事してはいない。彼らはただ、時間があって手元到大麦がある場合に、時たまそれを行うだけである。さて、その年におそらくたった12回しか蒸留所を使わない人に、たえずその蒸留所を運転している人と同じ位重い税を負担させることは、確かにとても不平等で不公平なことである。また、小規模な蒸留業者は、みずからの蒸留所を隠匿して税を免れるか、スピリッツに混ぜ物を入れて節約するかを余儀なくされる。というのも、それほど不平等な税の下では、彼が本職の蒸留業者と公平に競争をしようとしても、どうしても破滅状態になるのは確実なのだから。かくして、結局のところ、もてはやされているこの法律が、現行法と同じ位効果的に、小規模な蒸留業者の営業にとどめを刺すことになるというのである。

V. スピリッツの品質について、次のように問われたとしよう。(というのも、私はこの問題について、確かな知識があると敢えて言うつもりはないから) スピリッツは、大規模な蒸留所においては、小規模な蒸留所の中ほど、品質よく製造される可能性がないのか、また一般に実際そうされていないのかどうか? 少なくとも同じ程度に製造されうるし、一般に実際製造

されている、ということを、私は以下の理由によって信じたいと思う。すなわち、その税のために、数年の間、大規模な蒸留業者は小規模な者より安く販売することができなかったけれども、両者の競争は依然として継続しているし、彼らのスピリッツに対する需要も変化がなかったのではないのか。小規模な蒸留業者の友人が、われわれに信じ込ませようとしたように、もし彼らがより品質の劣るものからスピリッツを製造していたとすれば、それは決して実際にありえたことではなかっただろう。

しかしながら、これが私の確信できたらと願う点なのである。しかし、とはいっても、それは、人を欺くことに関心を持つ卑しい恥知らずな人々の叫び声ではなく、公平で中立な (impartial) 裁判によるものでありたい。

VI. 100ガロンの容量を持つ蒸留所は、モルトがま、納屋、穀物倉庫などの建築に必要とされるのと同じ位わずかなストックで建設されないのではないかと。さらに、こういう訳で、この規模の蒸留所は、現在麦芽樽 <sup>(15)</sup>〈malstrees〉がそうであるほど、この国でありきたりのものとならないのではないかと。その場合、現実がそうであるとしても、現行法に対する一大反対論を、すっかり消滅させることにはならないのではないのだろうか。「言われて来たのは、農業者は、以前は国内で平和に穀物を蒸留していたけれども、今では、この国の多くの地域において、大規模な蒸留業者の元へと、20から30、あるいは40マイルにもわたって穀物の運搬を強いられ、彼ら〈大蒸留業者〉と言え、農業者がやって来ても、自分が価値を見いだす限りにおいてだけ彼を利用するということである。」この法律以前にも、農業者は、現在そうしなければならぬのと少なくとも同じ位の距離にわたって穀物を運搬しなければならなかったのは、事実だけれども、この追加的不都合のせいで、麦芽になり、蒸留した後で、それをわざわざ持ち帰らなければならない。

VII. この法律のために、農業者たちが自分たちの家畜に、安く手ごろに餌を与えることができなくなるといふ反論は、同じ論法で回避できないだろうか？ 麦芽にするために自分の穀物を20マイルも運び、さらに蒸留するために同じ距離を持ちかえることによって、これまで自分の家畜用穀物の確保を常として来た農業者が、今度は大麦への一部負担 (part-payment) をしながら、同じ骨折りをして穀物を手に入れている。蒸留業者はまた飼料提供者でもあるが、自家用にそれを使用する場合に儲けることができる利潤と同じか、ほぼ同じ代価を払えば、自

---

(15) “malstree” については、Iseabail Macleod 氏 (Scottish National Dictionary Association) のご教示を得た。E-mailでの問い合わせに対して、きわめてスピーディな対応をして下さった。記して感謝したい。SND[1986]の“tree”の第7項目を参照のこと。A wooden barrel, keg, cask, esp. a cask to hold ale, etc.

分の顧客に常によろこんで穀物を販売するものである。もしも農業者にそれだけのものを与える能力がないのならば、穀物をできるだけ有利に使うことができる者と共に、穀物がとどまるのが、確かにその国の利益なのである。

VIII. 酔いをもたらすリキュールの中でたえずバタバタしていることから、農業者の勤勉や経営に生ずる危険のことは言うまでもないが、彼の勤勉を一つの、すなわち、かの然るべき経路に限定させることは、彼の勤労にとって何がしかの改善にならないのだろうか？ かなりの程度に改良が行われている国々においては、このことが常に当てはまる。しかしながら、この改革がこの上もなく必要であるような諸地域、つまりハイランドや国境諸地域においては、そうではない。ある程度のそうした補足的就業がなければ、農業者はしばしば仕事に事欠くことになる、反論されることが可能である。改良の方法という点で、今なお多くのことがなされるべきままとなっている国々においては、農業者にとって、決して怠惰でないことが必要とされる。

現行法に対して提出されてきた議論から以上のことを取り除き、残っているものの意義について落ち着いて考えてみなさい。わずかばかりの農業者、あるいは蒸留業者の利益について、今あなた方が決断を下すことを考えるのではなく、あなた方の国の平安、つまり、おそらくは、あなた方の国の存続について考えるのです。

この演説は長いことは長いけれども、私が言わんとしていた、熱意と自由（どこかに、それらが適当でないところもあろうが）について、認めてもらいたいものである。

私が誰であり、何者であるかは、誰にとってもほんのわずかな意味しか持たないことであるに違いない。しかし、私が間違った方向に導いたということが確かめられるならば、私は、善良な市民なら誰でも必ずそうなったに違いない限りにおいてのみ現在の論争にかかわっているし、支配者であれ、地主であれ、農業者であれ、蒸留業者であれ、あらゆる党派にはまったく関係を持たなかったのだから、人を惑わすつもりはなかったけれども、考え違いのために、そうなったに違いないのである。

9月26日

M.]

## V. 小括

新法の意図するところを小規模経営への課税と解して、それに対する反対論を展開しようという立場に対して、この論説の著者は、その法令自身の効力を疑い、冷静にその帰着するところを熟慮するように、8項目にわたる「示唆」を与えた。それに対するステュアートの立場は、どのようなものであったか。われわれは、続いて、後続する資料を検討しつつ、ステュアートのそれに対する反論を問題としなければならない。

## References

- Chamley, Paul[1965], *Documents relatief a Sir James Steuart*, Paris.
- Craig, Mary Elizabeth[1931], *The Scottish Periodical Press*, Edinburgh & London, .
- Crane & Kaye[1927], *A Census of British Newspapers and Periodicals, 1620-1800*, London, 1927.
- Grant William & David D. Murison[1986], *The Compact Scottish National Dictionary*, Aberdeen.
- Marr, George. S[1923], *The Periodical Essayists of the Eighteenth Century with illustrative extracts from the rarer periodicals*, London.
- Sen, S. R.[1957], *The Economics of Sir James Steuart*, Cambridge, Massachusetts.
- Skinner[1966], *Sir James Steuart An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767 Edinburgh & London.
- Smith, Adam[1976], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, general editors R.H. Campbell & A.S.Skinner, textul editor W.B.Todd, Oxford.
- Smith, George & Sydney Lee[1975], *The Compact Edition of the Dictionary of National Biography*, Oxford.
- Steuart[1998], *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767, in *Sir James Steuart, An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy* edited by Andrew Skinner: contributing editions, Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta, London.
- 渡辺邦博 [1989] , G.チャーマーズまでのJ.ステュアート——著作情報を中心にして——, 福島大学『商学論集』58-4, 福島大学経済学会。
- Weed, Katherine Kirtley & Richmond Pugh Bond[1946], *Studies of British Newspapers and Periodicals from their beginning to 1800, a bibliography*, *Studies in Philology, Extra Series*, December, no. 2.